

本能寺本『芝草句内岩橋上』訳注（四）

伊藤伸江・奥田 勲

心敬には、和歌と連歌の自作をおさめた全八冊からなる集『芝草』があった。彼は、この『芝草』所収の自句、自歌にみずから注をつけ、弟子たちに適宜与えていた。『芝草句内岩橋』もそのような心敬の営為による一作品であり、現在京都の古刹本能寺に上下二冊が蔵せられている。伊藤と奥田は、この作品の重要性に鑑み、翻刻と注釈を試みることにした。

【凡例】

一、底本は本能寺蔵『芝草句内岩橋上』である。対校本は、太田武夫氏蔵文明十一年古写本（文明本）、同じく太田武夫氏蔵明応十年古写本（明応本）の二本である。しかし、現在両本の閲覧が困難な状況にあり、両本との対校は原本によってはなしえない。したがって、両本は横山重・野口英一校訂『心敬集 論集』（吉昌社・昭和二一）の翻刻に依ったので、不審な点はその旨を注記した。略称として文明本は「文」、明応本は「明」とする。

一、翻字本文は、本能寺本を厳密に翻刻し、原文の表記の誤りかと考えられる箇所には、校注者が（ ）書きで「ママ」と注した。

一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記に改め、必要に応じて濁点を付し、句読点を補った。原文の表記の誤りかと考えられる箇所は改め、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が妥当と考えられる語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が（ ）書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いた。翻字本文との相違箇所については、翻字を適宜参照されたい。

一、注釈本文の各句には、便宜上、校注者による通し番号を付した。

一、訳注においては、【校異】、【他出文献】、【語釈】、【現代語訳】の項目を設け、必要な場合には【考察】【補説】等の項目も設けた。

一、【他出文献】にあげた心敬の作品集の略称は以下の通りである。

心玉集（野坂氏本）↓心玉集（野） 心玉集（静嘉堂文庫本）↓心玉集（静）

心玉集拾遺（静嘉堂文庫本）↓心玉集拾遺（静）

芝草内連歌合（天理本）↓芝草内連歌合（天）

芝草内連歌合（松平文庫本）↓芝草内連歌合（松）

また、芝草句内発句のうち、吾妻下向発句草におさめられた句は（吾妻下向発句草）と記した。

一、【語釈】にあげた和歌、連歌、歌論、歌論、連歌論などの引用は、後述引用文献に依る。読解に有効と考えられる場合には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。引用にあたっては私に濁点を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じて平仮名、漢字等に改めた。

~~~~~  
 【翻刻】

雨あをし五月の雲のむら柏

なか雨のや、晴のほるころの風情也雲の

むらかれるといへるはかり也これも景曲の躰  
とて今みることくの風躰にゆつり侍るはかり也

【校異】

あをし―青し(明) むら柏―むらかしは(文)、村柏(明) なか雨―長雨(文・明) やや―やうく(明) ころの  
風情也―比の風情也(文)、比(明) むらかれる―むらかれたる(文)、むらかる(明) はかり也―計也(文・明)  
これも―是も(文・明) 景曲の躰―景曲躰(明) 今―只今(文・明) みるごとく―見る如く(文) 風躰に―風情に  
(文) 侍るはかり也―侍なり(文)、侍計也(明)  
※自注一行目の「雲の」を『心敬集 論集』は「雪の」と翻刻しているが、誤り。また『連歌大観』の「芝草句内岩橋」  
は、句中の「五月の雲」を「五月の雪」、自注一行目の「雲の」を「雪の」と翻刻しているが、誤り。

【本文】

43、雨青し五月の雲のむら柏

長雨のやや晴れのぼるころの風情なり。雲の

むらかれるといへるばかりなり。これも景曲の躰

とて、今見ることくの風躰にゆつり侍るばかりなり。

【語釈】○雨青し：降る雨までも青く見えるという表現。非常に印象的な表現で、心敬の句以外では管見に入らない。

○五月の雲：五月雨時の空の雲。「郭公あり明の月にかへてきかむさ月の雲にもる一こゑ」(拾玉集・暁聞郭公・410)。

○むら柏：群がって生えている柏。柏はブナ科の落葉樹。ここは自注にいうように雲が群がる様子と柏の群生を重ね合  
わせている。「うづもるる遠山もとのむらがしがしが軒ばより雪はらふらん」(壬二集・遠村雪・2598、後に初句「風吹く」  
で、『愚見抄』、『桐火桶』、『二言抄』に入っている)。「むらがしはしげるばかりの神もうし木の間ゆるさぬ森の月影」(心

敬僧都十鉢和歌・面白鉢・杜夏月・131)。○長雨：陰曆五月の、梅雨の長雨。○晴れのぼる：空が晴れ、低くたれこめていた雲が高くあがっていくさま。「はれのぼるあさみの雲のしたことにはつ雪ふぶくひらのたか山」(出観集・冬：578)。

○景曲の鉢：景色が目の前にあるかのようにありのままに詠んだ風体。「おもては見様を先として、底に面白体を兼ねたらん歌を景曲とは申すべきにこそ」と『愚秘抄』に説明されている。

【他出文献】竹林抄1687 芝草内連歌合(天) 2578 吾妻下向発句草559 大発句帳3313

【補説】この句のような、自然の持つ色あいが、天空から降り落ちかかる降物にうつるといふ発想の句として、心敬には「雪青し梢や春になりぬらむ」(芝草句内発句・5)、「露青しさらに手染めの会津山」(芝草句内発句(吾妻下向発句草)・567)「露青し草葉の松や染めぬらむ」(芝草句内発句(吾妻下向発句草)・609)がある。また、44句も同じ発想であるし、49句も風への色の転移として注目されるものである。

#### 【現代語訳】

雨までも青く見えることだ、五月雨の空が少し晴れて、雲がむらがりのはっていき、群生する柏の木々の青さが雨に映っている。

長雨が次第に晴れてきて、垂れ込めていた雲が昇っていく頃の様子である。雲がむらがっているといっているだけなのである。これも景曲の鉢といって、現在見ているかのような様子の歌の姿にまかせて、詠んだだけなのである。

#### 【翻刻】

ゆふたちは杉むら青き山へかな

かやうの句をかふりはかりに夕立をいひ出して

所詮なしなと見給へる好士あり此等の句は

はしめよりはてまで夕立のことをいへるなり

夕立は過て跡青しと云山邊は雨のめくる

所ををけりはてまで雨のことをいへる也

定家卿哥あさ明に行かふ船のけしきまで

春をうかふる浪のうへかな

はしめよりはてまで春の心あまれる哥なるへし

【校異】

ゆふたちは―夕立は(文・明) 杉むら青き―杉むらあをき(文)、杉村青き(明) 山へかな―山邊哉(明) かやうの句を―加様の句を(明) はかりに―計に(明) 所詮なしなど―所詮なしと(文) はしめよりはてまで―初よりはてまで(文)、始より果まで(明) ことをいへるなり―事をいへる也(文・明) 跡青しと云―跡のあをしと云(文)、跡青といふ(明) 山邊は―山邊とは(明) をけりはてまで―終まで(文)、おはりまで(明) 雨のことをいへる也―雨の事をいへる(文)、雨の事をいへるか(明) 定家卿哥―定家卿哥に(文・明) あさ明に―朝あけに(文)、朝明に(明) 舟の―船の(文) けしきまで―気色まで(明) うかふる―うかへる(文) 浪のうへかな―浪の上かな(文)、波の上哉(明) はしめよりはてまで―初より終まで(文)、始果まで(明) 春の心あまれる哥なるへし―春の心の詞也(明) ※六行目「をけり」を『心敬集 論集』は「をはり」と翻刻しているが、誤り。また、『連歌大観』の「芝草句内岩橋」は、三行目「此等」を「此末」、六行目「をけり」を「をはり」と翻刻しているが、誤り。

【本文】

44、夕立は杉むら青き山辺かな

かやうの句をかぶりばかりに夕立をいひ出して

所詮なしなど見給へる好士あり。此等の句は、はじめよりはてまで夕立のことを言へるなり。

夕立は過ぎて跡青しと言ふ。山辺は雨のめぐる

所を置けり。はてまで雨のことを言へるなり。

定家卿あさ明けに行きかふ船のけしきまで

春をうかぶる浪のうへかな

はじめよりはてまで春の心あまれる哥なるべし。

【語釈】○夕立：夏の午後から夕方にかけてよく見られる、激しい雨。「夏の末の心、…（晩立ち）」(連珠合璧集)。○杉むら：杉が群生している所。「夕立や雨もふるの末に見て急ぐたのみは三輪の杉むら」(拾玉集・野径夕立・431)。「ちかく見えたる杉のむらだち／あさまだき山もと青き雨はれて」(連歌百句付2494／2495)。○かぶり：かむりに同じ。句の最初の五文字をいう。○所詮なし：その結果、意味するところが(後の句には)ない。はじめの五文字に夕立を言い出しても、そこで夕立の景は終わってしまい、後の句にはその景がないということであろう。○好士：風雅の道を好み、それをよくする人。歌人、連歌師などをいう。○めぐる：雨が山などの周りを沿うようにして降って移動していくこと。夕立が降りすぎていく時に使う語句であり、専順や親当にも用例がある。「霧かくれとをりの村や隔つらん／葛城山をめぐる夕立」(宝徳四年千句第五百韻・57／58・金阿／梁心)。「涼しき風ぞ空に知らるる／夕立は麓をめぐる峰の松」(新撰菟玖波集・551／552・能阿法師)。○定家卿哥：「あさなぎに行きかふ舟の気色まで春をうかぶる浪の上かな」(拾遺愚草・二見浦百首・109)。「玉葉集」(春上119)に入集しており、また『井蛙抄』にも「けしき」の例歌として入っている。「春」という言葉は四句目にしかないが、それが一首全体に影響を及ぼしているという作例としてあげたもの。『兼載雑談』には、「朝明に行かふ舟のけしき迄春をうかぶる波の上かな」について、「定家の此歌は、前後春の詞もなければ、全体春の景気なるゆゑに相応す。秋をうかぶるなどにては不可相応」とあり、歌全体に春のイメージがたたえら

れている歌と述べる。初句が「朝明に」となっているとところからも、心敬の教えを学んだものであろう。

【他出文献】芝草句内発句（吾妻下向発句草） 566

【現代語訳】

夕立が降り、杉の林が青々としている山辺では、降る雨も青く見えながらめぐっていくことだ。

こういう句を、はじめの五文字だけに夕立を詠んでいて、後の句には夕立の景が表現されていないと思っておられる好士がいる。（そうではなく）こうした句は、最初から最後まで夕立のことを言っているのである。夕立は、降り過ぎると、その濡れた跡が青々とするという。「山辺」というのは雨が降りながらめぐって移動していくあたりを表現して句に置いている。句の最後まで雨のことを言っているのである。（同様に）定家卿の「朝明に行きかふ船のけしきまで春を浮かぶる浪の上かな」という歌は、歌の最初から最後まで春の気持ちが横溢している歌なのである。

【翻刻】

散そはてかさなる水の一葉かな

いまたた、一葉なれともわか影を水にかさね

侍れはちりそへるか見えたとはかり也

【校異】

散そはて―ちりそはて（文） いまたた、―いまた（明） わか影を―我影を（文・明） 侍れは―侍は（明） ちりそへるか―散そへるか（文・明） 見えたとはかり也―見え侍る計也（文）、見え侍ると也（明）

【本文】

## 45、散りそはで重なる水の一葉かな

いまだただ一葉なれども、わが影を水に重ね  
 待れば、散りそへるかと思えたとばかりなり。

【語釈】○散りそはで：散り添わないで。「散りそはは一葉や秋のみなど舟」（宇良葉・越後府にて人の万句し待しに・239）。

○一葉：一枚の葉。七月一日など、立秋の時に、桐や柳の葉が落ちる光景を詠むことが多い。「秋の始めの心ナラバ、：一葉散」、「桐トアラバ、一葉」（連珠合璧集）。「七月渡の発句には、一葉散るは木枯をまたぬ体」（梅春抄）。宗祇が多く用いた語句でもある。「ちるやいつ風も吹きあへぬ一葉かな」（宇良葉・秋のはじめの発句に・237・宗祇）。

【他出文献】芝草句内発句 246

## 【現代語訳】

他の葉と共に散っているということではなく、自分の影と重なって二枚に見えている、水上のたった一枚の葉であることよ。

いまはまだ、たった一枚の葉であるけれども、自分の影を水に重ねていますので、他の葉と一緒に散っているのかと見えている、と詠んだだけである。

※ここから四句は本能寺本と、文明本、明応本それぞれに句順が異なる。本能寺本の句順46句く49句は、文明本では、46・47・49・48句の順になり、明応本は、47・46・48・49句の順となる。語順は異なるが、校異に関しては、それぞれ本能寺本の該当箇所記す。

## 【翻刻】

日をいたむ一葉、おとす風もなし

病葉など、て夏より色こき葉はわれと  
風よりさきに落侍れはなり

【校異】

一葉、一葉は(文・明) おとす―落す(明) 病葉など、て―いたむ葉とて(文) 色こき葉は―いたみて色こき葉は(明) われと―我と(文・明) さきに―先に(明) 落侍れはなり―おち侍れはなり(文)、落侍れは也(明)

【本文】

46、日をいたむ一葉は落とす風もなし

病葉などとして、夏より色濃き葉はわれと  
風より先に落ち侍ればなり。

【語釈】○日を：照る日の光を。「あかねさすあをみな月の日をいたみあふぎのて風ぬるくもあるかな(惠慶法師集・夏・224)。「日をいたみ堤の草は色もなしさきなほこりそおもだかの花」(柿園詠草・夏花・217)。○いたむ：苦痛を感じる。嘆く。傷つき悪くなる。「一事を必ず成さむと思はば、他の事の破るるをもいたむべからず」(徒然草一八八段)。「車の牛は暑氣をいたむ物とかや」(俳諧類船集・蓋)。○一葉：一枚の葉。「こがくれに秋風見ゆる一葉かな」(菟玖波集・七月一日・順覚法師・2103)。「露ながらちるは風なき一葉かな」(竹林抄・秋立ちける日・行助・1705)。○風もなし：風も吹かないように感じられること。「秋はけさ一葉に見えて風もなし」(大発句帳・秋・4328・昌休)。和歌においては、風もないのに、花が散る、梅が薫るといった風情を詠むことが多い。「比しもあれ風もさそはず風もなしこころづからや今にはふらん」(草根集(類題本)・落花・1412)。連歌においては、春のみならず、秋の風の様、酷暑の頃の様などさまざま自由な詠まれ方をする。「ながるる汗のむつかしの身や／この暮の蚊の声満ちて風もなし」(行助句集・823／824)。なお、「風もなし」は心敬も好んでつかう表現。『芝草句内岩橋』にも、「梅咲けば松かうばしき風もなし」(10)、「散る花にあ

すはうらみん風もなし」(20) が既に見える。○病葉：夏に、虫食いや病気のために変色し、青葉にまじっている朽葉のこと。「わくら葉にそめし梢を初にて時雨につくす秋の色かな」(松下集・秋・792)。「わくら葉は秋風またぬ木の間かな」(大発句帳・夏・三井寺にて最上里見尾張守追善に・紹巴)。○色濃き：色濃く変色しているさま。病葉の赤や黄に変わった葉の様子は、正広がしばしば歌に詠んでいる。「わくら葉もともに千しほの梅の雨時雨となりて紅葉しぬらん」(松下集・梅雨・1424・長享三年五月十日詠)。「わくらばは蟬を時雨の紅葉哉」(染田天神法楽千句(応永卅三年六月八日)第九百韻・発句・康)。「わくらばやもみぢしげみのゆうひかげ」(梵燈日発句・420)。

【他出文献】心玉集(野) 306、心玉集拾遺(静) 1740、芝草内連歌合(天) 2591、芝草内連歌合(松) 56、芝草句内発句(吾妻下向発句草) 434

【考察】「日をいたむ一葉」は、「を：み」という伝統的な語法、たとえば「風をいたみ」や「瀬をはやみ」などから心敬が発想した語法だろうか。ただし、この「いたむ」は四段活用の動詞であり、苦痛を感じる、嘆くの意である。心敬は日光にさらされた病葉を擬人化し、あたかも木の葉に心があるかのように表現するために、動詞「いたむ」を選んだのではない。釈においても「われと風より先に落ち侍れば」と説明している。

### 【現代語訳】

夏の強い日差しを苦にした一枚の葉は、それを吹き落とそうとする風もないのに、自分から落ちていくことよ。

病葉などといって、夏の内から色の濃くなっている葉は、自分から風よりも先に落ちるから、このように詠んだのです。

### 【翻刻】

天河たかうたかたもよる瀬かな

あわを哥といひなしたる万人の手向哥は  
天川瀬にこそより侍らめとなり

【校異】

天河―天川（明） よる瀬かな―よるせ哉（明） あわを―あはせ（明） いひなしたる―云なしたる（文）、いひなしたり（明） 万人の手向哥は―万人の平句哥は（文）、万の人の手向の哥（明） 天川瀬にこそ―天川にこそ（文）、今日は彼瀬つらをこそ（明） より侍らめとなり―より侍らめと也（文）、せくはかりなるらめと（明）

【本文】

47、天の河たがうたかたもよる瀬かな

あわを哥といひなしたる、万人の手向け哥は  
天の川瀬にこそより侍るらめとなり。

【語釈】○うたかた：水面に浮かぶ泡。「泡トアラバ、みなわ共、うたかたともいふ。」（連珠合璧集）。ここでは「うたかた」に「歌」を掛ける。「よる」は「うたかた」の縁語。「かたばかり書きて手向くるうたかたを二つの星のいかが見らむ」（建礼門院右京大夫集・314）。○よる瀬かな：寄る瀬であることよ。「神風やいせきは花のよる瀬かな」（連歌愚句・文安六年三月太神宮に而或人興行の千句のうち・宗御・243）。○手向け歌：神仏に祈りを捧げる歌。「手向歌天津国津の社よりかずをつくして神やうくらん」（草根集・神社・8738・享徳三年十二月二十日詠）。七夕の日には、梶の葉に歌を書き、二星に手向ける。「手向け歌つみぬる梶の七葉かな」（染田天神法楽千句（応永卅四年七月七日）第一百韻・発句・如一）。○天の川瀬：天の川の瀬。瀬は流れの速くなっている所。「忍びあまり天の川瀬にことよせんせめては秋を忘れだにすな」（新古今集・隔河忍恋といふことを・1129・正三位経家）。「よもすがらそらゆく月のかげさえて天の川瀬や秋こほるらむ」（兼好法師家集・秋天象・172）。

【他出文献】心玉集（静）788、心玉集（野）223、芝草句内発句248

【現代語訳】

天の川の川瀬には、どんな水泡も漂って近づくもので、また誰が手向けた歌であろうか、泡のようにはかない歌も流れて近づくことよ。

泡、すなわちうたかたを歌といいなしている。七夕の日に、万人が二星に手向ける、手向け歌は、天の川の川瀬に流れ寄るのであろうということである。

【翻刻】

おり姫は月にかすみのころもかな

世人は七夕にこそかし侍るに星の霞の衣は

月におほへはなり七夕の霞の衣本文侍れは

いへり

【校異】

おり姫は―をり姫は（文）、織姫は（明） かすみのころもかな―霞の衣かな（明） 世人は―世の人は（文） 七夕にこそ―星にこそ（明） 星の霞の衣は―七夕の霞衣は（明） おほへはなり―おほへは也（明） 七夕の霞の衣―七夕霞衣の事（明） 侍れはいへり―に侍れは也（文）、に侍万葉などにも見え侍り（明）

【本文】

48、織姫は月に霞の衣かな

世の人は、七夕にこそかし侍るに、星の霞の衣は

月におほへばなり。七夕の霞の衣、本文侍れば  
言へり。

【語釈】○織姫は…この語は、心玉集では「たなばたは」となっており、自注の文章も「たなばたは」が初句である方が自然である。○霞の衣…霞を織姫の衣にみたてて言ったもの。『和漢朗詠集』に「去衣曳波霞応湿 行燭浸流月欲消」（七夕・菅三品・216）と二星が会いに行く際の衣を霞に見立てられており、和歌にも「ほどもなくたちやかへらむたなばたの霞の衣なみにひかれて」（相模集・22）と表現された。ここでは、「霞」に「かす」を掛けている。この掛詞は他句に例をみない。「あらればしりの玉しきの庭／いさよひの月に霞の色さえて」（小鴨千句第五百韻・宗砌／之基・70／71）。○七夕にこそかし侍る…七夕にかしますのに。『貫之集』に「七夕に脱ぎてかしつる唐衣いとど涙に袖やくちなん」（七月七日・12）の例が見える。「かす」は「主なくてさらせる布をたなばたにわが心とや今日はかさまし」（古今集・雑上・橘長盛・927）などから、供えるの意か。「架す」「竿す」と考える説もある（片桐洋一『古今和歌集全註釈』一八〇番歌【鑑賞と評論】）。「七夕トアラバ、衣かす」（連珠合璧集）。○月におほふ…月に対して、おおって包みかくすこと。○七夕の霞の衣…『相模集』に「ほどもなくたちやかへらむたなばたのかすみのころもなみにひかれて」（22）という歌がある。

【他出文献】心玉集（静）790、心玉集拾遺（静）1690、芝草句内発句249、心玉集（野）132（初句「たなはたは」）  
【現代語訳】

月に霞がかかり、まるで織姫が月に霞の衣をかしているかのようだ。

世間の人は、七夕に衣をかしますのに、織女星の霞の衣は、月におおいをしているので、（このように詠んだ）のである。七夕の霞の衣というのは、典拠となる本文がありますので、言いました。

【翻刻】

ちらしかね柳にあをし秋のかせ

いまた初秋のかせなれば柳をもはらひかね

つよからすと也秋の風の青きといへること葉を

うらやみ侍る斗也本哥柳に青き庭の春風など

えんに面白侍れば也

【校異】

ちらしかね―散しかね(明) あをし秋のかせ―青し秋のかせ(文)、青し秋の風(明) かせなれば―風なれば(文・明)  
 はらひかね―拂かね(明) 秋の風の青きといへること葉を―秋のかせ青といへることはを(文)、秋の風の青きといへ  
 る事を(明) 侍る斗也―侍計也(文明)、本哥―本哥にも(文・明) えんに面白侍れば也―えんに面白く侍れば也(文)、  
 おもしろくや(明)

【本文】

49、散らしかね柳に青し秋の風

いまだ初秋の風なれば、柳をも払ひかね、

強からずとなり。秋の風の青きといへる言葉

うらやみ侍るばかりなり。本歌柳に青き庭の春風など

艶に面白く侍ればなり。

【語釈】

○「ちらしかね」：散らすことができず。○「柳に青し」：柳を吹くことで、青く感じられ。本歌は「つばめなく軒は  
 の夕日かげきえて柳にあをき庭のはるかぜ」(風雅集・釈教・「薬王品、是真精進、是真法供養如来といへる心をよま  
 せたまひける」・2056・花園院)である。○「秋の風」：本歌は春風が柳の葉の色をうつして青く感じられる、春の歌であるが、

心敬は、初秋に季節を変えている。柳に秋風が吹く光景は、勅撰集では『玉葉集』に初出、『風雅集』には夕日になり、柳の姿などの歌が見られた。そのうち、柳の下葉が散る時期の詠が、「下葉ちる柳の梢うちなびき秋風たかし初かりのこゑ」（玉葉集・秋上・581・宗尊親王）であるが、心敬の句は、秋であつても、まだ風もごく弱い初秋の頃の造形であり、柳の下葉も枯れて散り落ちるような時期には至っていない。それゆえ、京極派和歌が新たに注目した、秋の夕日に照らされ、風にゆれる柳という静かな風景に近い感覚を持った上で、その中でもさらに「風」に着目しての句作といふことになる。 「夕づくひいはねの苔にかけきてをかの柳は秋かぜぞふく」（風雅集・秋上・509・前大納言為兼）。

【他出文献】芝草句内発句277、何船百韻（成立不詳心敬以前・初句「ちりしえぬ」）

#### 【現代語訳】

いまだ弱々しいために、柳の葉を散らすこともできず、青く吹きすぎていくことだ、秋の風は。

まだ初秋の頃の風であるので、柳を払うこともできかね、強くはないのである。秋の風が「青き」と詠んでいる言葉をうらやましく思い（使った）だけなのです。本歌の「柳に青き庭の春風」などという句が、優美で趣がございませうから（使った）のです。

#### 【翻刻】

さしてけり櫛のは山のゆふ月夜

五節の舞の雲の上人などはさしくしとてかならず

黒かみにくしをさし侍れはなり夕月くしに似たれ

はいへり祇園法楽なれば稲田姫のゆつのつまくし

などのことにそへて申侍り

## 【校異】

ゆふ月夜―夕月夜(明) 舞の雲の上人などは―舞の雲上人などは(文)、舞人は(明) さしくしとて―さしくしなど、  
 て(明) かならず黒かみに―かならず黒髪に(文)、女人黒髪に(明) くしをさし侍れはなり―櫛をさし侍れは也(文)、  
 くしをさし侍也(明) 夕月―夕月夜(明) くしに似たれはいへり―櫛に似たれはいへり(文)、くしに似たるにたと  
 へ(明) 祇園―祇園(文) ゆつのつまくし―ゆすのつまくし(明) などのことにそへて―などの事にそへて(文)、  
 などにそへて(明) 申侍り―申侍る也(文)

## 【本文】

## 50、さしてけり櫛のは山の夕月夜

五節の舞の雲の上人などはさしぐしとて、必ず

黒髪に櫛をさし侍ればなり。夕月、櫛に似たれ

ばいへり。祇園法楽なれば、稲田姫のゆつのつまくし

などのことに添へて申し侍り。

【語釈】○さしてけり…さしていることよ。月の光が射すことと、櫛を髪に差すことを掛ける。○櫛のは山…「櫛の歯」と「端山」を掛けている語。「櫛の歯」は正徹、正広が和歌に詠み、心敬も、連歌に詠んでいる。「くろかみもとりて(類題本系統「とかで」) 日ぞふる櫛の歯をひくよりしげき恋のみだれに」(草根集・寄櫛恋・632)。「櫛の歯を心に引きてかよへどもわが手にかくる黒髪もなし」(松下集・寄櫛恋・3053)。「霜の色そふ髪のはに風も音する冬の空」(落葉百韻・毘親/心敬・22/23)。○夕月夜…月がのぼりはじめた夕暮れ時。また夕方の月。こは月。「浦より霞む志賀の唐崎/山越えて見れば向ひの夕月夜」(竹林抄・秋・404・専順)。「太山がくれの春のしげき/ゆふ月夜かすめる峯に猿啼て」(吾妻邊云捨・29/30)。○五節の舞…十一月の新嘗会の際に行われる童女の舞。十一月の中の丑の日に、

帳台の試、寅の日に御前の試、卯の日に御覧、辰の日に豊の明の節会がある。○さしぐし…髪のかざりとしてさす櫛。五節の舞に際して、舞姫は髪に櫛をさす。また、御前の試の際には、舞姫は御前に櫛を奉る。その他、五節所に棚を設けて櫛を飾るなどし、親しい間柄では櫛を送りあう。「たれこめて豊の明も知らざりき君こそ見せめ夜半の挿櫛」（弁内侍日記・大納言）。○夕月…夕方に出る月。その形から、心敬は櫛との形の類似をいうが、行助は鎌との類似を詠んでいる。「いねぞかすめるまき出しの駒／夕月は初草刈りの鎌に似て」（行助句集・635／636）。○祇園法楽…祇園社に奉納する法楽連歌。祇園社の祭神は牛頭天王（素戔嗚尊）であった。○稲田姫…奇稲田姫。素戔嗚尊は、出雲国において、ヤマタノオロチを退治し、奇稲田姫を妻とした。姫の姿を湯津爪櫛にし、髪にさしたことが日本書紀に見える。「故、素戔嗚尊、立に奇稲田姫を化して湯津爪櫛にし、御髪に挿したまふ」（日本書紀・神代上）。「わぎもこがゆつのつまぐしさしもやはつれなき人を思ひわたらん」（後鳥羽院御集・恋百首・967）。「くろかみにたれとるならでわぎもこがゆつのつま櫛さしかへすらん」（草根集・寄櫛恋・474）。○ゆつのつまぐし…清められた櫛。『袖中抄』には、顕昭説として、清められた爪のような形をした櫛という。「湯者、是伊波比支与麻波留辞也。津者是語助也。爪櫛者其形、如爪也」（袖中抄・第七・ゆつのつまぐし）。「かつ見れど猶ぞこひしきわぎもこがゆつのつまぐしいかがささまし」（新勅撰集・恋三・法性寺入道前関白家歌合に・藤原基俊）。

【他出文献】心玉集（静） 810、心玉集（野） 241、芝草句内発句 251  
【現代語訳】

月の光が、櫛の歯をさすようにさしこんできていることだ。低い山のあたりにまるで櫛のような形の月が見える夕暮れ時は。

五節の舞において、舞を舞う雲の上人などは、さしぐしといって、必ず黒髪に櫛をさしますから、「さす」といいました。夕暮れ時の月は、櫛の形に似ていますから、このようにいっています。祇園法楽の連歌なので、奇稲田姫の湯津爪櫛などのことに添えて申しました。

## 【翻刻】

雨もしれ五日をちぎる秋のかせ

おりしも五日に侍れば五日の風十日の雨のこと

を申いたし侍り何となく祝などの席なれば也

## 【校異】

ちぎる秋のかせ―ちぎる秋の風(文)、契る秋の風(明) おりしも―時しも(明)、五日―秋の五日(文)、初秋の五日

(明) 五日の風十日の雨のこと―五日の風十日の雨の事(文)、五日風十日雨(明) 申いたし侍り―申也(文)、思ひ出し侍り(明) 何となく祝などの席なれば也―何となく祝などの席なればなり(文)、祝などの席なれば也(明)

## 【本文】

51、雨も知れ五日をちぎる秋の風

折りしも五日に侍れば、五日の風十日の雨のこと

を申しいだし侍り。何となく祝などの席なればなり。

【語釈】○雨もしれ：雨もわかつてくれ。こうした呼びかけは、「月」や「人」に対する句が多く、「雨」に呼びかけた句は、この句以外には管見に入らない。「なげく心よ天地も知れ／国となり世となるよりの恋もうし」(心敬句集菩提・1848／1849)。

○五日…『論衡』に見られる「五日の風十日の雨」を使った表現。「五日の風十日の雨」は、五日に一度風が吹き、十日に一度雨が振ること、氣候が順調に推移するさまをいう。「儒者論『太平瑞應』…文言下…風不レ鳴レ條、雨不レ破レ塊、五日一風、十日一雨上。」(論衡・是応)。「それ賢王の御代のしるし、五日の風や十日の雨、潤ふ四方の草木まで、靡き従ふこの時に、生まれあふ身はありがたや」(謡曲・東方朔)。

【他出文献】芝草句内発句（吾妻下向発句草） 569

※日文研連歌DBの芝草句内岩橋（本能寺本）は「さつきをちきる」と翻刻されているが誤り

【現代語訳】

雨もわかっておいておくれ。五日の風が、よい天候を約束するかのようちようど五日に吹いているのだ。

折しも五日でございますので、五日の風、十日の雨ということを申し出しました。

特にどうということありませんが、祝いなどの席でしたので、こう詠んだのです。

【翻刻】

山ふかし心におつる秋の水

山閑の秋の水の冷ととしたるに心をすまし

侍れはむねのうちと水とひとしく清々たりと

いへり

【校異】

山ふかし―山深し（明） 秋の水―あきの水（文） したるに―したるにむかひて（明） むねのうちと水と―胸のうち

水と（明） たりといへり―たる事を（明）

【本文】

52、山深し心に落つる秋の水

山閑の秋の水の冷え冷えとしたるに、心を澄まし

侍れば、胸のうちと水と等しく清々たりと

言へり。

【語釈】○山深し：深い山の様子。「雪深しころもふかし山深しとひくる人のなきぞうれしき」（拾玉集・厭離欣求百首・320）。○心におつる：心の中に落ちる。心の中が、山中を流れる澄み切った水をたたえるような境地になるさま。「たえまなく誘ふ風よりただ一葉心に落つる山ぞ静けき」（心敬僧都十牀和歌・一節体・落葉・27、心敬集では第四句は「心と落つる」）。○秋の水：ここは山奥の川の水。「奥山に夏をば遠く離れきて秋の水澄む谷の声かな」（秋篠月清集・納涼・122）。心敬は『ひとりごと』において、「げにも水ほど感情深く清涼なる物なし。春の水といへば心ものびらかに面影も浮かびて、何となく不便なり。夏は清水のもと、泉の辺、また冷え寒し。秋の水と聞けば、心も冷々清々たり。」と述べている。○山閑：山の静けさの中にあること。「閑」の境地は、心敬にとつて非常に大切なものであった。「ただ教寄と道心と閑人との三のみ大切の好士なるべく哉」（老のくりごと）。○清々たり：大変清らかですがすがしい。

【他出文献】心玉集（静）798、心玉集（野）232、芝草句内発句272、芝草内連歌合（天）2592、芝草内連歌合（松）57

【現代語訳】

山深く、清らかな秋の水が流れ落ちている。私の心にも、その水が流れ入るかのように澄み切った気持ちになっていくことよ。

静かな山の秋の水が冷え冷えとしてしているのに対して、心を澄ませば、胸のうちと水とが、同じように清らかであると言っているのである。

【翻刻】

花とをく馬なく萩かは山かな

籬などの萩のさける比をちきりて遠山の馬

の一こゑをき、たるはかり也萩かは山などは

ことはのえんにひかれていへる也ひとへに景曲躰

斗也

【校異】

とをく―遠く(明) なく―鳴(明) は山かな―は山哉(明) 籬―深山(明) ちきりて―契て(文・明) 遠山の鴈の―こゑ―遠山の鴈の一聲(文)、とを山の鴈の一聲(明) きゝたるはかり也―きゝて(文)、聞たる計也(明) などは―など(文、明) ことはのえんにひかれて―詞のえんにひかれて(文)、言葉のえんにひかれて(明) ひとへに景曲躰也―一重に景曲の躰なり(文)、ひとへに景曲の躰、見ることくのみ也(明)

【本文】

53、花遠く雁鳴く萩がは山かな

籬などの萩の咲ける頃をちきりて、遠山の雁

の一声を聞きたるばかりなり。萩がは山などは

言葉の縁に引かれて言へるなり。ひとへに景曲躰

ばかりなり。

【語釈】○花遠く：花から遠く。自注にあるようにこの場合の花は萩。花からの距離が遠いことを「花遠し」と詠んだ発句に「花とほしにほひにかすむ軒の梅」(竹林抄・心敬・1577)がある。○は山：端山。人里に近い、低い山。「端」には「葉」を掛けている。遠山では雁が鳴き、端山では籬に萩が咲いている光景である。また、「萩がは山」ということで、句全体に「は」音が三度反復する形となり、音の縁がある。○籬などの萩：垣根のあたりの萩。「籬」は竹などを荒く編んで作った垣根。「まつは雨風は秋なる夕べかな／籬の萩に重き上露」(看聞日記紙背連歌(応永三十二年七月二十五日片何百韻・栄仁親王／庭田重有・発句／脇)。○ちきりて：約束したかのように、同じ頃に。○景曲躰：景色をその

ままだ詠みこんだ歌の姿をいう。↓43 語釈参照。

【他出文献】心玉集（静）801、心玉集（野）234、芝草句内発句275

【現代語訳】

花から遠く離れたところで、雁が鳴いている、そんな萩の花咲く端山であることよ。

籬などに萩の花が咲いている頃に、約束したかのように遠くの山の方で雁が鳴く、その一声を聞いている、というだけなのである。「萩が端山」などというのは、言葉の縁に引かれて言っているのである。ただもう全く景曲  
 牀の句であるだけである。

【翻刻】

花とをく霧にかすみの木すゑ哉

此遠きは秋より春の比をいへり霧にかすめる

木すゑはさながら春の色ながら花をみし比には

遠し

【校異】

花とをく―花遠く（明）霧にかすみの―霧にかすめる（文）、霧に霞の（明）木すゑ哉―こすゑかな（文）、梢かな（明）  
 遠きは―とをきは（文）春の比―春の心（文）かすめる―霞める（明）木すゑ―梢（文・明）春の色ながら―春  
 のことくには侍と（明）遠し―遠しと也（明）

※『連歌大観』の「芝草句内岩橋」は、三行目「花を」を「花と」と翻刻しているが、誤り。

【本文】

## 54、花遠く霧に霞の梢かな

此の遠きは、秋より春の頃をいへり。霧に霞める  
木ずゑはさながら春の色ながら、花を見し比には

遠し。

【語釈】○花遠く…花の頃はもう遠く過ぎて。○霧に霞の…霧によって霞んでいて。自注にいう「霧に霞める」の意。

心玉集の二伝本は「霧にかすめる」である。「里遠き梢に影はかたぶきて霧にかすめる在明の月」（夫木抄・秋  
四・正応三年内裏御会、暁月・二条為世・5417）。

【他出文献】芝草句内発句304、心玉集（静）850（第二句「霧にかすめる」）、心玉集（野）280（第二句「霧にかすめる」）

## 【現代語訳】

花の頃はもう遠く、今は霧によってまるで霞の頃のように霞んでいる、そんな梢であることよ。

この「遠き」は、秋から見えて春の頃が遠いことを言っている。霧に霞んでいる梢は、まるで春の頃そのままのよ  
うな様子なのだが、春に花を見た頃は遠い（昔である）。

【補説】二つの「花遠く」という初句を持つ句を並べるが、それぞれに「花」の意味が違うことを自注で示している。  
弟子への指導書というに相応しい文言である。

## 【引用文献典拠一覧】

和歌の引用は原則として『新編国歌大観』により、『草根集』は『新編私家集大成』本によった（『新編国歌大観』によつた場合には、（類題本）と注している）。また、『万葉集』の歌番号は西本願寺本（旧国歌大観番号）により、引用は『新編日本古典文学全集』によっている。連歌関係その他、引用は左記に記すが、『連歌大観』第一卷（古典ライブラリー・平成二八）を適宜参照している。

- 芝草句内発句：貴重古典籍叢刊5『心敬作品集』（角川書店・昭和四七）
- 吾妻邊云捨：貴重古典籍叢刊5『心敬作品集』（角川書店・昭和四七）
- 心玉集・心玉集拾遺（静嘉堂文庫本）：貴重古典籍叢刊5『心敬作品集』（角川書店・昭和四七）
- 心敬句集苔庭：貴重古典籍叢刊5『心敬作品集』（角川書店・昭和四七）
- 行助句集：貴重古典籍叢刊11『七賢時代連歌句集』（角川書店・昭和五〇）
- 連歌愚句：貴重古典籍叢刊11『七賢時代連歌句集』（角川書店・昭和五〇）
- 愚秘抄：『日本歌学大系』第四卷（風間書房・昭和三二）
- 連珠合璧集：中世の文学『連歌論集一』（三弥井書店・昭和四七）
- 連歌百句付：貴重古典籍叢刊5『心敬作品集』（角川書店・昭和四七）
- 宝徳四年千句：古典文庫『千句連歌集三』（昭和五六）
- 新撰菟玖波集：天理図書館善本叢書『新撰菟玖波集実隆本』（天理大学出版部・昭和五〇）
- 兼載雑談：『歌論歌学集成第十二卷』（三弥井書店・平成一五）
- 徒然草：新日本古典文学大系『方丈記 徒然草』（岩波書店・平成元）
- 梅春抄：中世の文学『連歌論集四』（三弥井書店・平成二）
- 宇良葉：日文研データベース所収桜井氏蔵本（深井一郎氏による翻刻「宗祇連歌発句集 宇良葉」）（『金沢大学教育学部紀要8』（1960）も参照）
- 菟玖波集：金子金治郎『菟玖波集の研究』（風間書房・昭和四〇）
- 竹林抄：新日本古典文学大系『竹林抄』（岩波書店・平成三）
- 大発句帳：古典俳文学大系 CD-ROM 所収鈴木本
- 染田天神法楽連歌：日文研データベース及び谷嶋美智子「【翻刻】染田天神法楽連歌（応永期）」（『奈良教育大学国文

研究と教育」第三号・1979)

小鴨千句：古典文庫『千句連歌集三』(昭和五六)

日本書紀：新編日本古典文学全集『日本書紀(二)』(小学館・平成六)

袖中抄：『歌論歌学集成第四卷』(三弥井書店・平成一二)

論衡：新釈漢文大系『論衡中』(明治書院・昭和五四)

東方朔：日本古典文学全集『謡曲集(二)』(小学館・昭和四八)

ひとりごと：新編日本古典文学全集『連歌論集能楽論集俳論集』(小学館・平成一三)

老いのくりごと：中世の文学『連歌論集三』(三弥井書店・昭和六〇)

看聞日記紙背連歌：図書寮叢刊『看聞日記紙背文書・別記』(養徳社・昭和四〇)

#### 【参考文献】

岡見正雄「心敬覚書―青と景曲と見ぬ佛―」(『室町文学の世界―面白の花の都や―』(岩波書店・平成八)

片桐洋一『古今和歌集全註釈(上)』(講談社・平成一〇)

鹿目俊彦「風雅集の一考察―特に秋部の歌材をめぐって―」(『語文(日本大学)』第十九号・昭和39・10)

この訳注は、科研費基盤研究C「中世歌学の享受から見た心敬の文学作品の創造と新撰菟玖波文学圏への影響に関する研究」の成果である。